

皆で渡れば恐くない

我が国には、古くから「隣百姓」といふ言葉がある。「隣では田んぼを耕し始めたぞ。家でも始めよう」とか、「隣では種播きをしてゐるぞ。家でも種播きをしなくては」とかと言った具合に、「隣近所に合せて仕事をするお百姓」といふ意味の事を言った言葉である。このやうに我が国では、種播き、田植糸から収穫に至るまで、隣近所が同じ歩調で田畑の仕事をやるから、すべての田畑が一様の成長を見せるのが、我が国の農村風景の特徴である。だから、田植糸から取入れまでの水田の光景は、区画整理の見事さと相俟って実に整然としたものがある。

ところが、同じ水田でも、東南アジアの国々では、田植えから収穫に至るまで、てんでんばらばらであって、我が国の画一的な光景とは実に対照的である。だから、「隣百姓」は我が国の農業の特性であると言ってもよいのではないかと思ふ。

かういふ性格が、「赤信号、皆で渡れば恐くない」といふ考へ方を生んであるのだと思ふ。安全なはずの青信号でも、「独りで渡るのは恐い」のである。その反対に、危険であるはずの赤信号でも、「皆と一緒に渡れば恐くない」と思ふのが、多くの日本人に共通した考へ方のやうである。かういふ考へ方は、この狭い風土の中で長い年月に互って培はれ

て来たものであるだけに、「悪い」と思ひ、「改めなければいけない」と思つても、なかなか困難のやうに思はれる。

一つの土地に長い間住みついて生活して来た同じ農耕民族でも、我が国は東南アジアの国々の民族とはこのやうに異った性格を有つが、これが、昔、牧畜に生活の拠り所を置いて来た西欧民族となると、一層大きな違いを見せる。転々と住みかを移動して、言葉の通じない異民族とも接して生活して来たのであるから、強く自己を通さなければ生きて行けなかったに違ひない。だから、独立心が強く、日本人のやうには簡単によその考へ方を受け入れる事をしないのだと思ふ。

私はこの二十年間、幼児教育に従事して、内外の幼稚園を多く視て来たが、日本の幼稚園位、いろいろな国のいろいろな教育が行はれてゐる国は無いと思ふ。それと言ふのも、日本人は(先に述べたやうに)よその物事に対して「直に感心してしまふ」性格があることと、「その感心した事を直に見事に接ぎ木する特殊能力を備へてゐる」ためとである。

その点、よその国の人たち、とりわけ欧米人は、「よその物事に対して直に感心して、それを簡単に取入れる」といふ事をしない。私は、大学の幼児教育研究所長を勤めてゐた十年間、ほとんど毎年、幼稚園の先生方を案内して欧米の教育視察をして回り、向ふの先生方と話し合ふ

日本語の再発見

機会を有ったけれども、欧米の先生方はたいていその国の伝統的な教育法を重んじてみて、日本の先生方のやうに、よその新しい教育法に関心を有たないことを知った。モソテッソーリの教育法でも、シュタイナーの教育法でも、日本の方がそれらの本国よりもずっと有名であり、盛んに実践されてゐる位である。